

8月31日（月）ヘブル人への手紙2章16節

「当然ながら、イエスは御使いたちを助け出すのではなく、アブラハムの子孫を助け出してくださるのです。」

ここで再びイエス様と御使いの関係に話が戻ります。御使いは、主によって助け出される必要はありませんので、また御使いは霊であって、肉と血とを持ちませんので、主イエス様が助け出されるのは信仰によるアブラハムの子孫である私たち一人一人ということになります。

ここでヘブル書の著者には、イザヤ書41章8節「だがイスラエルよ、あなたはわたしのしもべ。わたしが選んだヤコブよ、あなたは、わたしの友アブラハムの裔だ。」が念頭にあったと思われます。ですから、「私たちの父はアブラハムです。」と、ユダヤ人として自分たちの肉の父はアブラハムであることを強調して語る者たちに、イエス様は、「あなたがたがアブラハムの子どもなら、アブラハムのわざを行うはずです」と言われました。（ヨハネの福音書8章39節）ここで言われているアブラハムのわざとは、「望み得ない時に望みを抱いて信じ」「不信仰になって神の約束を疑うようなことはなく、かえって信仰が強められて、神に栄光を帰し、神には約束したことを実行する力がある、と確信していました。」（ローマ人への手紙4勝18, 20, 21節）と言われているような信仰による義を言っているのでしょうか。ですから、アブラハムの子孫とは、霊的な意味でアブラハムの裔よと呼ばれている、選ばれた神のしもべたち、アブラハムの信仰を共有するすべての者のことであると言えます。

昨日見ましたように、十字架上ですべての罪をその身に負い、血を流し、肉を裂かれ、死なれましたが、三日目によみがえられたのは、悪魔を滅ぼし、死の恐怖から人々を解放するためでしたが、それは信仰によるアブラハムの子孫として選ばれている私たちを悪魔と死から助け出すためでした。そのようにして救いによる恵みのわざによって助け出され、アブラハムの子孫としての歩みを始めた私たちですから、最後まで信仰を全うしたいと思わされます。

9月1日（火）ヘブル人への手紙2章17節

「したがって、神に関わる事柄について、あわれみ深い、忠実な大祭司となるために、イエスはすべての点で兄弟たちと同じようにならなければなりませんでした。それで民の罪の宥めがなされたのです。」

「イエスはすべての点で兄弟たちと同じようにならなければなりませんでした。」とありますが、これは14節の「そういうわけで、子たちがみな血と肉を持っているので、イエスもまた同

じように、それらのものをお持ちになりました。」を思い出させます。特に、この17節においては、「すべての点で」とありますように、血と肉だけではなく、罪以外のすべてにおいて人と同じようになられたということが強調されています。それは「あわれみ深い、忠実な大祭司となるため」と言われています。旧約の時代に大祭司は、ただ一人で、他の人が入ることのできない神殿の一番奥にある至聖所に入り、イスラエルの罪の贖いのために、犠牲をささげてとりなしをした人物です。イエス様は、私たちの罪の贖いのために、一人で十字架へと進んで行かれました。そこは、罪のないイエス様しか行くことのできない、ある意味イエス様にとっての至聖所でした。「それで民の罪の宥めがなされたのです。」とありますようにイエス様により罪の宥めがなされたのですが、宥めをドナルド・ガスリーという学者は、「いけにえをささげることに関する典型的な用語で表現され、祭司職の概念に固有な言葉」と説明しています。ですから、あわれみ深い、忠実な大祭司となられたイエス様にとっては、宥めという表現こそ、ふさわしいと言えます。そして、宥めは、人間の罪から来る神の怒りを鎮めることですが、人は自力で神の怒りを宥めることはできません。その罪に対して無力な人間のために、神自ら罪がもたらす怒りを鎮める道を備えてくださいました。それは大祭司イエス様が、自らを十字架に罪の宥めのいけにえとして献げることでした。イエス様は、十字架の上で一人ひとりが受けるべき神の怒りとのろいをその身に受けられたことにより、私たちの完全な罪の宥めがなされたので、私たちが再び罪から来る神の怒りのもとに置かれることは決してありません。そのようにして、神と私たちとの罪によって破壊された関係が回復されたのです。

主イエス様は、人に対してはあわれみ深い大祭司であり、神に対しては救いを成し遂げられた忠実な大祭司なのです。

9月2日（水）ヘブル人への手紙章2章18節

「イエスは、自ら試みを受けて苦しまれたからこそ、試みられている者たちを助けることができるのです。」

ここで、ヘブル人への手紙の著者は、イエスが「自ら試みを受けて苦しまれた」と言うことにより、試みと苦しみが密接な関係にあることを明らかにしています。これまで、イエスの苦しみは人の持つ人間的な弱さにより引き起こされたものと考えられてきました。だからこそ、試みられている者たちが、悲しみ、痛み、苦しみを経験する中であっても、イエスは彼らを助けることができると主張されてきました。しかし、むしろイエス様が経験された試みは、メシヤとしての務めに関わるもので、それは肉体や感情的な苦しみ以上のものを表していると言えます。

ですから、この試みとは十字架の苦しみを指していると考えべきです。十字架は、主イエス様にとって最大の試みであり、最大の苦しみでした。イエス様は、そのような十字架の苦しみを味わった者として、「試みられている者を助けることがおできになります。」とされています。私は、ここの「助ける」というのは、どういう意味なのだろうかということのを少し考えさせられました。試みから救い出してくださるということなのだろうか。試みを軽くしてくださるということなのだろうかなど、いろいろなことを考えました。しかし私が結論的に神様から示されたことは、罪を犯さないように守ってくださいということなのではないかということです。ここでヘブル人への手紙の著者が、あえて試みという言葉を使ったのは、主イエスにも罪を犯させるような誘惑が常にあったということではないかと思います。それは決して行動や言葉や思いで罪を犯すというよりも、十字架を避けたい、できれば十字架にはかかりたくないとの思いの中で十字架を避けて父なる神のみこころに背くというかたちでの罪です。しかし、イエス様は決して父なる神のみこころに背くことなく、最後まで父なる神のみこころに従い通されました。そのようにして、すべての点で兄弟たちと同じになられたあわれみ深い、忠実な大祭司イエス様が常に私たちが主のみこころに従って歩めるようにと励まし、助けてくださるのです。そして仮に私たちが試みの中で父なる神のみこころに背くようなことがあっても、悔い改めるなら十字架の上で試みを受けて苦しまれた主イエスキリストが私たちの罪を赦して、そこから新しい歩みを始めさせていただきます。そのようにして私たちを助けてくださるのです。

私たちには十字架という誰も受けたことがない、そしてこれからも受けることのない試みを受けて苦しまれた主イエス様がともにいてくださり、私たちがみこころに従い通して最後まで主にある勝利の歩みし、主の栄光をともに受けることができるように最後まで助けてくださることを信じて、主の御名を呼び求めつつ、歩んでまいりましょう。

9月3日（木）ヘブル人への手紙章3章1節

「ですから、天の召しにあずかっている聖なる兄弟たち。私たちが告白する、使徒であり、大祭司であるイエスのことを考えなさい。」

最初に「天の召しにあずかっている聖なる兄弟たち。」と呼びかけられています。まず、私たちは「天の召しにあずかっている」ということです。召しというのは、呼ばれる、招かれるということです。天のお父様が私たちを罪から救うために、ご自身にあつて聖なる者とするために、また死から永遠のいのちへと移すために私たちをあわれみをもって招いてくださったということです。それにより、私たちは、その神様と一つにされていることが、天の召しです。そして

「あずかる」というのは、「加わる」とか「ともにする」ということです。私たちは、その招きに応じて、その招きをともにすることで、互いに神により聖別され、神のものである聖なる兄弟とされているということです。2章11、12、17節でも「兄弟たち」という言葉が用いられていましたが、ここにおいても兄弟たちと呼び、私たちも一つにされていることと、そこにある幸いな交わりの祝福を示しています。

「ですから」というのは、2章14、15節にあるように、主イエスご自身が肉体を取って人となられ十字架にかかれることで死から私たちを解放してくださったこと、また2章17、18節にあるように、人となられ、罪以外のすべての点で私たちと同じようになられ、ご自身が試みを受けて苦しまれた主イエスが、私たちに対してあわれみ深い、忠実な大祭司となってくださったことを指していると考えられます。そのような事実があるからこそ、このヘブル人への手紙の著者は、「私たちが告白する、使徒であり、大祭司であるイエスのことを考えなさい。」と言っているのです。使徒とは遣わされる者との意味があり、イエス様も父なる神により遣わされたという意味では、使徒と言えます。そして、考えるとは、心をこの方に注意深く向けるという意味です。私たちも日々の信仰生活の中で、使徒であり、大祭司であるイエス様に注意深く心を向けて歩みたいと思わされます。そして、天の招きに応じた私たちだからこそ、イエス様のことを教えられ、イエス様のことを考えることのできる恵みにあずかっていることに感謝したいと思わされます。

9月4日（金）ヘブル人への手紙章3章2～4節

「モーセが神の家全体の中で忠実であったのと同様に、イエスはご自分を立てた方に対して忠実でした。」（2節）

1章で、御使いよりもイエス様がいかに優れているかということをヘブル人への手紙の著者は立証しようとしていました。それと同時に、今度は3章2節から始めて、モーセよりもイエス様がいかに優れているかを立証しようとしています。もしかすると人々の間にイエス様よりもモーセを尊敬し、崇拝する雰囲気があったからかもしれません、この2節のみことばによって、作者は、モーセの忠実さや彼の働きを決して過小評価しようとしているのではありません。イエスご自身に関しても「あわれみ深い、忠実な祭司」と言われていますし、モーセもイスラエルの民を導いて出エジプトを果たし、民に律法を与えました。そのような意味でも「しもべとして神の家全体のために忠実でした。」と言われています。ですからここでは、むしろイエスとモーセの役割の違いと申しましょうか、イエスはモーセよりもより大きな働きを委ねられていた

ということを言おうとしていると考えるべきです。

民数記12章7節でモーセについては「彼はわたしの全家を通じて忠実な者」と言われています。つまりモーセはあくまでもイスラエルの民によって形成された群れに仕えるしもべであつたということです。しかし神の御子であるイエスは3節で「家を建てる者」と呼ばれています。つまりイエス様が家を建てられたわけで、モーセはただその家のしもべであつたことが分かります。ですから家を建てられたイエス様の方が当然モーセよりも大きな栄誉を受けるべきです。そして4節においては、神は家以上のすべてものを造られた方であり、まさにイエス様は神だからすべてのものを造られた方としてモーセ以上の栄光を受けるべきだということです。イエス様が建てられた神の家というのは、私たちの教会であり、私たちの交わりであると言うことができるでしょう。それは、すべて使徒であり、大祭司であるイエス様によるということです。そして牧師も、信徒一人ひとりも聖なる祭司として教会に仕えています。イエス様も、常に私たちの交わりに豊かにご臨在され、祝福してくださっていることを感謝しましょう。

9月5日(土) ヘブル人への手紙3章5、6節

「しかしキリストは、御子として神の家を治めることに忠実でした。」(6節)

モーセとイエス様の間には共通点もありますが、決定的な相違点は、しもべと御子というアイデンティティーの違いです。

御子であるイエス様によって建てられた神の家において、5節でモーセは「しもべとして」神の家全体に仕える奉仕者であつて、しもべとして与えられているその働きに対して忠実であつたと言われています。特に「後に語られることを証しするために」とあるように、神からの啓示を通して、人々に来るべきメシヤであるキリストを忠実に証しし続けたことが評価されています。それに対して「しかし、キリストは、御子として神の家を治めることに忠実でした。」とあるように、モーセがあかした来るべきメシヤとして神の家を忠実に治められるのです。ですから、御子イエス様は、モーセが仕えた神の家の上に立つお方です。モーセには後に語られることを証しするという務めが与えられていて、そのことに忠実でした。私たちも、神の家の構成メンバーとして、神様からそれぞれの働きが与えられています。それに対して神のしもべとして忠実でありたいと願わされます。

「そして私たちが神の家です。もし確信と、希望による誇りを持ち続けさえすれば、そうなのです。」とあります。一般的に希望は、将来において実際的には何の根拠もなく、しばしば実現する見込みのない願望を指すことが多くあります。しかし、私たちの信仰において、神は將

来的にみことばを通して約束されたことは必ず成就されます。ですから、将来的に、みことばを根拠として、主が約束されたことは必ず成就するとの確信をもとに、将来に対して希望を持つことができますし、その希望は、私たちの世に対する誇りともなりえます。私たちは、世にあって決してクリスチャンとして卑屈になる必要はありません。むしろ、救いを通してこのような恵みをいただいている幸いを誇りとしたいと思わされます。また、この確信と希望による誇りが、神の家の一員であることの、ある意味資格と言えます。そのようにして、神の家にあっては、互いに確信と希望による誇りを告白し合いながら、互いに励まし合って歩んでまいりたいと思わされます。

9月6日（日）ヘブル人への手紙3章7節

「ですから、聖霊が言われるとおりです。」（7節）

7～11節までは、詩篇95篇7～11節の引用です。しかし、このヘブル書の著者は、この引用に関して「詩篇95篇7～11節にあるように」というような表現をしないで、「聖霊が言われるとおりです。」と記しています。つまり彼は、聖霊によって語るべきみことばが示されたことを明らかにしているとともに、旧約聖書も聖霊による靈感を受けたものとみなしているということです。私たちが、みことばを読む時、また礼拝で説教を聞くときには、この信仰がどうしても必要です。なぜなら聖霊によらなければ、私たちは本当の意味でみことばの真理を理解することができないからです。この聖霊の働きを「聖霊の照明」と言います。聖霊なる神が私たちの心を照らしてくださって、聖書の意味を明らかにしてくださるからです。聖書はすべて神の靈感によるものであり（テモテへの手紙第二3章16節）「預言は～聖霊に動かされた人たちが神から受けて語ったものです。」（ペテロの手紙第二1章21節）ですから、聖霊が私たちに語り、教えてくださらなければ、私たちは本当の意味でみことばの真理を正しく認識し、悟ることができません。聖書を読む時に、聖霊の語りかけを聞こうとしなければ、私たちはみことばに関して誤った理解を持ったままになったり、自分に都合のよい解釈をしたりするようになるでしょう。「しかし、その方、すなわち真理の御霊が来ると、あなたがたをすべての真理に導き入れます。」とされているように、（ヨハネ16：13）聖霊は私たちを真理へと導いてくださるお方です。ですから、この聖霊によらなければ、誰もみことばの真理を悟ることができないということをおぼえなければなりません。

私たちは、聖霊が語られるということの大切さを認識し、みことばを聞く時に聖霊の助けを祈り求めているでしょうか。聖霊なる神様を通して直接教えていただける恵みにあずかってい

ることに感謝しながら、聖霊の助けを常にいただいて、みことばの真理を理解し、神のみこころを正しく悟り、示されたみことばにふさわしく応答できる者でありたいと思わされます。